



Title	トロントの経験 : 日系カナダ人一世のライフヒストリーとコミュニティ
Author(s)	濱, 多寿子
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39357
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	濱 多 壽 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (人 間 科 学)
学 位 記 番 号	第 1 1 4 8 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 6 年 6 月 2 1 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	トロントの経験 －日系カナダ人一世のライフヒストリーとコミュニティ－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 井 上 俊 (副査) 教 授 直 井 優 助 教授 梶 原 景 昭 教 授 大 村 英 昭

論 文 内 容 の 要 旨

本稿は、第二次大戦後のトロントにおける日系カナダ人とそのコミュニティをライフヒストリー法をもちいて考察している。日系カナダ人をめぐる社会学的研究は、これまでブリテッシュ・コロンビア州の日系コミュニティを対象としておこなわれたものが多く、トロントのコミュニティを研究したものは、日本においてもカナダにおいても非常に少ない。断片的な論考は、たとえば新保満やK.Vウジモトラのものがあるが、まとまった社会学的研究は1976年の真壁知子によるトロント大学Ph.D論文だけであるといっても過言ではない。そして真壁の研究もトロントの日系カナダ人二世三世のエスニックアイデンティティをめぐって質問票による量的な調査にもとづいた考察であることから、本稿のような日系カナダ人一世のライフヒストリーを分析し解釈し、さらに都市やコミュニティとの関連も考察の視野にいれた質的な研究は初めての試みである。

周知のとおり、第二次大戦勃発後、日系カナダ人は、その大半が住んでいたブリテッシュ・コロンビア州沿岸部から内陸部へ総移動させられ、収容所生活を送った。終戦直後の1945年から46年にかけて、カナダ政府は、日系人にカナダ東部へ移動するか、日本へ送還されるかの選択を迫ったのであるが、最終的に1946年におこなった個々人の選択が<1946年の選択>である。本研究で<1946年の選択>に注目するのは、この選択に直面したすべての個人の人生にとって重要なターニングポイントになったからであり、トロントに移り住むことを選んだ人たちにとって、この選択がトロントという<都市の経験>の開始を意味したからである。またこの選択は、戦後のトロントに日系コミュニティの形成を導いたことから、個人だけでなく集団にとっても重要な起点であった。<1946年の選択>を転機として個人の経験を考察しながら、歴史的出来事と個人の人生との関係をさぐることで、そして<1946年の選択>以降のトロントでの人生を<都市の経験>という視点からとらえ、個人と都市の関係を考えることが本稿の中心となるテーマである。このテーマの背景には、個人のライフヒストリーから<都市の経験>をみるという、都市社会学においてこれまで不十分だった個人中心的な視点の導入を図り、さらにこの視点をトロントの日系カナダ人の研究に応用するという意図がある。

本稿は、大きく3部から成っている。I部では、上述のような問題の設定と方法、実際の調査の経緯と調査対象者について説明している。本研究でとる方法は、ライフヒストリー法である。ライフヒストリー法は、調査対象者に直接会っ

て、インタビューをおこない、自分の経験を語ってもらう手法であるが、とくにつぎの二つの利点に着目している。

一つの利点は、ライフヒストリーが<ストーリー>と<ヒストリー>の側面をあわせもつことである。ライフヒストリーの<ストーリー>の側面とは、ライフヒストリーが現在の時点で過去の経験を再構成して語られた「経験の物語」であることをさしており、そこから個人の解釈や「意義」が表現されたさまざまな言説をとらえることができる。<ヒストリー>の側面とは、語られた経験のなかに、誕生から現在にいたる時間の流れが内包されており、そこから「人生の軌跡」あるいは個人史を抽出できることをさしている。

二つには、「ライフヒストリーの重ね合わせ」という、複数のライフヒストリーを並列して呈示する方法がとれることである。とくにおなじ社会的属性をもつ複数の人びとのライフヒストリーを重ね合わせることによって、それぞれのライフヒストリーがいかに個性化されたものであるかがわかる一方で、個性化されているとおもわれた「経験の物語」や独自のものと考えられた「人生の軌跡」も、おなじ属性をもつ人びとに共有された特徴のあることがあきらかになる。一つのライフヒストリーがもつ<ストーリー>と<ヒストリー>という二つの側面を同時に生かすこと、さらに複数の「ライフヒストリーの重ね合わせ」によって単一のライフヒストリーではみえなかったものをとらえること、これらの利点をとりいれることが本研究の方法上のオリジナルな試みである。

調査対象とするのは、<1946年の選択>をなんらかのかたちで経験し、トロントに暮らす8人の日系カナダ人一世である。かれらは、<1946年の選択>でカナダ東部へ移動することを選び、トロントへ移り住んだか、あるいはいったん日本へ送還されることを選んだか、それとも<1946年の選択>以前にトロントに来ており、選択に直面しなかったかのいずれかの人たちである。かれらのライフヒストリーを検討すると、重要なターニングポイントになった<1946年の選択>は、それぞれの「人生の軌跡」のありかたに違いを生じさせただけでなく、かれらの語る「経験の物語」にも差異をもたらしている。選択後のライフヒストリーでは、一方で新しい都市トロントでの新鮮な経験が物語られており、他方で、戦後まもない日本で非常に厳しい生活苦を経験し、その後カナダに戻ってトロントに来ることを決めるまでの経緯が語られている。

そこでⅡ部では、<1946年の選択>かそれ以前にトロントに来たものといったん日本へ行くことを選んだものとを対比的に区別して、それぞれのライフヒストリーを分析し、一人一人の「トロントの経験」を記述し呈示している。語られた言葉を生かした詳細な「トロントの経験」は、8人が個性的な「都市の経験」をもっていることを示しており、ここが本稿の中心となるところである。

とくにつぎの三点を考察している。「人生の軌跡」のなかでトロントへ来たことがどう位置づけられるかを探ること、トロントという都市にどのように定着し、都市的な生活様式を確立していったかという個人の<都市化>のプロセスをみること、トロントという都市をどう語っているかという<都市の言説>をあきらかにすることである。ここではライフヒストリーの<ヒストリー>の側面から「人生の軌跡」と<都市化>のプロセスをみて、<ストーリー>の側面から<都市の言説>をとらえている。

さらに8人のライフヒストリーを重ね合わせると、<1946年の選択>の違いは、とくに1950年代の「経験の物語」の差異としてあらわれていることがわかる。1950年代のトロントを経験した人たちは、トロントへの定着期であった1950年代の<都市の経験>をもっとも鮮やかに豊かに物語っている。おなじ選択をおこなったかれらには、共有されている<都市の言説>と共通にみられる<都市化>のプロセスがあることがわかる。そこでⅢ部では、1950年代の「トロントの経験」が非常に重要であることをふまえて、当時、トロントの日系コミュニティで刊行されていた日系新聞の記事の分析と1950年代の日系コミュニティの組織化についての検討という二つの視角から、個人のライフヒストリーでみられた<都市の言説>と<都市化>を再考している。

一つには、1950年代の「大陸時報」という日系新聞の記事を分析すると、この新聞が日系コミュニティの情報を伝え、その動向を映しただけでなく、トロントをめぐるさまざまな<都市の言説>を集めたにつくりだし、読者に提供するメディアでもあったことがわかる。これらのなかには個人のライフヒストリーでみられる<都市の言説>と共通するものが多くみられ、日系新聞で形成された<都市の言説>は、個人のレベルの<都市の言説>に深い影響をあたえ、その核となっていることがあきらかになった。新聞から獲得された<都市の言説>は、トロントの肯定的評価やト

ロント生活の意義づけであり、個人の＜都市化＞を促進するはたらきをしたと考えられる。

いま一つには、戦前には日系人がほとんどいなかったトロントに＜1946年の選択＞によってやってきた人たちが、1950年代に一挙に日系コミュニティを形成していく状況を考察している。当時の新聞の紙面からも、個人のライフヒストリーからも、日系一世たちが1950年代の日系コミュニティのなかでいろいろな団体の創設に関わり、さまざまなネットワークをつくり、新しく生成するコミュニティの主役であったことがわかる。日系コミュニティにおける急速な組織化とその変遷をみるなら、コミュニティで多角的な組織化が進むこともまた、そこに関与した個人の＜都市化＞のプロセスのなかで、都市への定着を強力に促進するはたらきをしたことがわかる。

1950年代のトロントは、人口の急増とメトロポリタン都市の形成、大量の移民の流入による多民族化の進展、経済的な成長と活況による空前の繁栄という都市の出来事で特徴づけられる、大変豊かな、大きく変貌する都市社会であった。＜1946年の選択＞という歴史的出来事に直面してこの都市に移り住んだ日系一世たちが出会ったのはこのような豊かな都市社会であるが、個人のライフヒストリーには、個人と都市との相互作用のなかでこの都市の条件に個人の側でいかにうまくあわせることができたかが語られている。そして日系新聞や日系コミュニティは、個人が都市にタイミングを合わせるうえで、重要な役割をはたしていたことがわかった。これら新聞やコミュニティのような中間カテゴリーは、個人と都市のあいだを結ぶものであり、個人史と社会史の交差するところとしてとらえられるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、エスニック・モザイクの都市といわれるトロントにおける日系カナダ人とそのコミュニティを対象とする調査研究であるが、とくにトロント日系コミュニティの形成期（1950年代）に焦点を合わせ、方法としては日系一世へのライフヒストリー・インタビューを主体としている。

本論文の功績の一つは、現在80－90歳代に達している日系一世の人のライフヒストリーを丹念にたどることによって、いわば平凡な庶民の日常生活の歴史を描きだし、そのことを通して、抑圧と差別の側面を過度に強調しがちな従来のカナダ移民研究の偏りを是正している点にある。

また、トロントという都市、あるいはそこにおける都市化の進展が、それぞれの個人によってどのように経験されたかを問う「都市の経験」の記述と分析は、これまでのオーソドックスな都市社会学では未開拓の領域に踏みこむ試みであり、この点も本論文の独自の貢献として高く評価できる。

さらに、「大陸時報」というエスニック・プレスが日系人のトロントへの適応と定着に果たした機能の分析、日系人コミュニティのネットワークと組織化についての考察、ライフヒストリー・アプローチを活用して個人史と社会史の交錯をとらえようとする工夫などにおいても、本論文はすぐれた成果を挙げている。

以上の理由によって、当審査委員会は本論文が博士（人間科学）の学位授与に十分なものであると判定した。